

第1回気象学史研究会「気象学史研究はどうあるべきか」を開催

気象学史研究連絡会

気象学史研究連絡会が2016年12月に発足して初の研究会合「第1回気象学史研究会」を2017年度春季大会にあわせ、5月27日(土)国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催した(第1図)。事前の予想を大きく上回る60名を超える参加者があった。前日の学会定期総会での岩崎理事長の挨拶で、当研究連絡会の活動に特段の期待を示していただいたことも寄与したと思われる。科学史等関連分野にも広報に努め、学会外からも多くの参加があった。

今回は「気象学史研究はどうあるべきか」をテーマに掲げ、基調講演を京都大学名誉教授・気象学会元理事長の廣田 勇氏、招待講演を神戸大学大学院国際文化研究科教授の塚原東吾氏にお願いした。



第1図 第1回気象学史研究会(2017年5月27日(土)国立オリンピック記念青少年総合センター・センター棟310会議室)の様子。(a)基調講演を行う廣田 勇氏。(b)招待講演後の質問に答える塚原東吾氏。(c)世話人を代表して挨拶する三上岳彦氏。(d)講演後の質疑応答。

最初に本研究連絡会世話人のひとりである三上岳彦氏(帝京大学)が研究連絡会の活動について、3つの柱として、学問としての気象学の歴史、歴史的気象観測の実態とその利用、気象学と社会との関わりの歴史的経緯を考えていること、2001年設立の国際気象学史委員会など国際的な組織・活動との連携も進めていきたいと挨拶した。

廣田氏からは「歴史を学ぶ、歴史に学ぶ—科学史の視点に関する一考察」と題して基調講演をいただいた。氏は「社会との関わり」については今回は一切触れず、あくまで学問的に議論したいと前置きされ、歴史学の基本概念の多様性、その中の科学史・気象学史の独自性、気象学史を議論する意味と意義について、欧米・日本の多くの著作から多数の実例を挙げながら論じ、学問が先人からの長い歴史で綿々と続いていること、歴史学が趣味的な古文書集めではなく、今のわれわれにとって意味のあるものを選び出すものであってほしいと結ばれた。資料はレジュメ1枚のみであったが飽きせぬ展開と興味深い内容で参加者を引きつけた。大気力学の研究者として世界の第一線に立ちつつ、文系にまでわたる広い分野の教養を深められ、それらを有機的に統合して多くの示唆を与える、廣田氏ならではの印象的な講演であった。

続いて塚原氏から「科学史のなかでの気象学史：「歴史の科学化」と社会史視点という両輪」と題した招待講演をいただいた。科学史・科学技術社会論に足場を置きつつ、気象学会員との共同研究であげられた多くの成果の実例を紹介され、科学史と、その科学史が対象とする当該の科学そのものとの相互作用が重要になっていること、こうした動きが「ポスト・ノーマル・サイエンス」と呼ばれる現代社会における科学のあり方の議論に通じることを述べ、本研究会のような分野間の共同研究や交流の場があることに期待したい

と結ばれた。理系学部出身から幅広いキャリアを積まれた塚原氏の活躍の一端をうかがわせる説得力のある講演であった。

質疑応答では、聖書などの古代文書に見られる特異現象の気象学的解釈、我が国における科学史研究者の活動状況、我が国の気候変動研究史の検証、明治期英国人による気象観測データの当時の利用方法など、幅広い観点から活発に議論が行われたが、そのいずれもが今日のわれわれの営みへの繋がりを強く意識するものであった点は共通していたように思われる。今回「気象学史研究はどうあるべきか」をテーマに掲げたが、今回の研究会が、参加者それぞれが「どうあるべき

か」洞察を深める一助となったのであれば幸いである。

最後になるが、講演いただいた廣田氏・塚原氏、また開催にあたりご支援ご協力をいただいた講演企画委員会および大会実行委員会のみなさまにこの場を借りてあらためて御礼申し上げます。

なお廣田氏の講演内容は「天気」今月号に掲載、塚原氏のものも追って掲載予定である。

本研究会は、今後は春季・秋季大会に合わせての開催を基本とし、第2回の気象学史研究会は2017年度秋季大会（10月30日～11月2日・札幌市）にあわせての開催を準備している。